

## 『秋道プロジェクト 鹿児島全体会議』開催される！！

去る2月の6日午後と7日午前に、鹿児島県歴史資料センター黎明館で、秋道プロジェクトの2004年度全体会議が開催されました。両日は、プロジェクト・リーダーの秋道智彌先生をはじめ、ズブズブ班、人類生態班、森林農業班、モノと情報班、中国班、北タイ班から、総勢48名ものプロジェクト・メンバーが集まりました。

全体会議のセッションは、午後1時から始まりしました。そのセッションでは、はじめに秋道先生による開会の挨拶、つづいて、プロジェクト全体のグランド・デザインと2005年度の活動方針についての説明がおこなわれました。



①さあ、いよいよ全体会議のはじまりです！



②秋道先生がグランド・デザインの説明をしています

2時から、ズブズブ、人類生態、森林農業、中国、モノと情報の順で、各班の2004年度の活動報告と2005年度の活動計画についての発表がおこなわれました。このセッションでは、持ち時間40分のなかで、それまでの班と班員の活動についてのプレゼンテーションを各班が趣向を凝らしておこない、あわせて、その内容に関する質疑応答がなされました。



③各班のメンバーによるプレゼン。どんな研究成果がうまれるか、いまから楽しみです



④黎明館の川野先生による小講演。熱い語り口が心に響きます。

その後に、黎明館学芸専門員で、今回の全体会議のホストをつとめていただいた川野和昭先生による黎明館の紹介とご自身のラオス調査に関する小講演がおこなわれました。6時過ぎに一度散会し、黎明館近くのレストラン＆リゾート宿泊施設、敬天閣で、懇親会が開かれました。この懇親会では、黎明館館長から歓迎のお言葉をいただいた後に乾

杯し、その後、2時間あまりにわたって、鹿児島料理と焼酎を肴に歓談しました（その後は、思い思いに小グループに分かれて、夜の街に繰り出していったことは言うまでもありません）。

7日のプログラムは、9時半のポスターセッションから始まりしました。メンバーの皆さんは、前夜の痛飲をものともせずに参集しました。つづいて10時から、事務・会計報告を、秋道研本部の西村雄一郎さん（ズブズブ班）と長坂旬子さんからしていただきました。ここでは、2004年度の会計報告と2005年度の予算関係の動向、フィールドに出かけるさいの予算や物品に関する留意事項などについて説明されました。

10時半からは、総合討論に移りました。時間の制約上、前日の各班の発表では十分に聞けなかった各班のディテール、プロジェクト全体の今後の方針、フィールドでの病気やけがへの対処法、フィールドでの遺伝資源を含む資源管理などについて、意見交換と熱い議論が交わされました。



⑤予算関係の説明。みんな興味しんしんです。



⑥総合討論で。ここでも熱い議論が交わされます。

その後、12時過ぎに秋道先生から閉会の挨拶をいただき、全体会議は無事に終了しました。あるメンバーは帰路に着き、あるメンバーは次の仕事のある場所に飛び立って行きました。また、この日の午後からは、川野先生による黎明館案内と、川野先生が長年にわたって個人収集され、黎明館収蔵庫に保存されている川野コレクションの見学会もおこなわれました。

お忙しい中を参集していただいたメンバーのみなさま、お疲れ様でした！！次回の全体会議は、2005年の春ごろに予定されています。そのときに、ふたたび、元気な姿で再会しましょう！！（総合地球環境学研究所 清水郁郎）



⑦川野先生のご発声で乾杯！

ラオス・フィールドステーションワークショップが、2004年1月25日(日)、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科で開催された。"Forest Management and Conservation in Laos"のテーマのもと、ラオス国立大学林学部のフンペットさん、カムレックさん、そして、京都大学大学院生のアノロムさん、小坂さんから、次のような話題が提供された。

Houngphet CHANTHAVONG 'Forest management and conservation in Laos'

Khamleck XAYDALA 'Introduction on edible forest products in Lao PDR'

Anoulom VILAYPHONE 'NTFPs gathering of Khum community after implementation of land allocation program: a case study from national biodiversity conservation area, northern Lao PDR'

Yasuyuki KOSAKA 'Plant diversity in paddy fields in relation with human use and management in Savannakhet Province, Laos'

発表終了後は、約10名の参加者とともに有用植物や森林管理に関する活発な討論がおこなわれた。

\*\*\*\*\*

2004年4月23日、京都大学東南アジア研究所で、班の昨年度の研究成果について、報告があった(写真)。報告者は、長期間現地に滞在し、フィールドワークを行ってきた院生などが中心である。報告プログラムは以下のとおりであった。

「ラオス北部山岳地域における貨幣経済の浸透が生業構造に及ぼす影響」松浦美樹(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科) / 「ラオス北部の焼畑休閑林における植生変化—ウドムサイ県La郡Houay phae村の事例から—」広田勲(京都大学大学院農学研究科) / 「ホームガーデン植物利用の実態—東北タイ・マナオ村プータイの人々の事例研究」内田ゆかり(京都大学大学院農学研究科) / 「中国南部とラオスにおけるアジアのVigna」友岡憲彦(農業生物資源研究所) / 「ラオス・ルアンパバン近郊におけるモチイネについて—サンプリング調査報告—」武藤千秋(総合地球環境学研究所)

これらの報告をうけて、以下のようなことが議論の中で触れられた。

- 1) ラオス(北部)の植生あるいは景観はどのように変化してきたのだろうか。原植生はどのようなもので、それがどのようなメカニズムで、例えば竹が卓越する二次林植生が生まれてきたのか。このメカニズムにおいて焼畑や森林伐採はどのような役割を果たしたのか。
- 2) 販売目的の森林産物の採取については、従前は安息香やカルダモンなどのごく少数のものしか利用されていなかったが、近年、それが多種多様になった。では、それがどのような森林環境のもとでどのように多様化しているのか。どのような流通ネットワークが形成されつつあるのか。
- 3) 自家消費用の自然産物はどのように採取され、どのように利用されているのか。それが変化してきているとすると、それは何を契機としているのか。1)に述べるような植生や景観の変化、市場経済の浸透は、自然産物採取にどのような影響を与えているのか。自然産物利用は、生活システムの中でどのように位置づけられるのか。
- 4) 1990年代後半以降、村単位の土地利用計画が策定されつつある。それでは、実態として、土地利用はどのように管理されてきたのか。土地利用計画の策定は土地管理の実態をどう変えたのか。
- 5) 過去60年間のラオスの政治経済体制の変化をみると、戦争、革命、集団化、市場経済の導入、と大きく揺れ動いている。これらは、人々の移住や生活や生業にどのようなインパクトを与えてきたのか。

さらに、班の共同調査地として、ウドムサイ県ナモ一郡に位置するナムパック川流域が提案され、共同研究のひとつとして、横山・落合から「〇〇村有用植物採集・栽培地図」の作成に関する調査案が提案された。  
(京都大学東南アジア研究所 富田晋介)





# のげいとう便り 1 ラオスで見たものの写真館

(森林農業班フィールド便り)

調査旅行の間に見たもの聞いたもの食べたもの.

そんなこなをご紹介.

2003 年 10 月にラオスのルアンパバンに調査に行ったときの写真.

現地に着いた日はちょうど灯籠祭りでした.

紙で作った灯籠や御輿を河へ流すのです.

幻想的 . . .

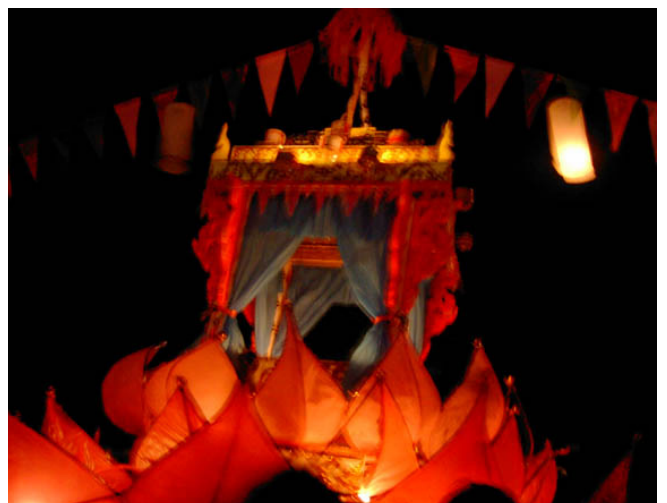
道路脇では夜に向けて灯籠を作って売っていました .



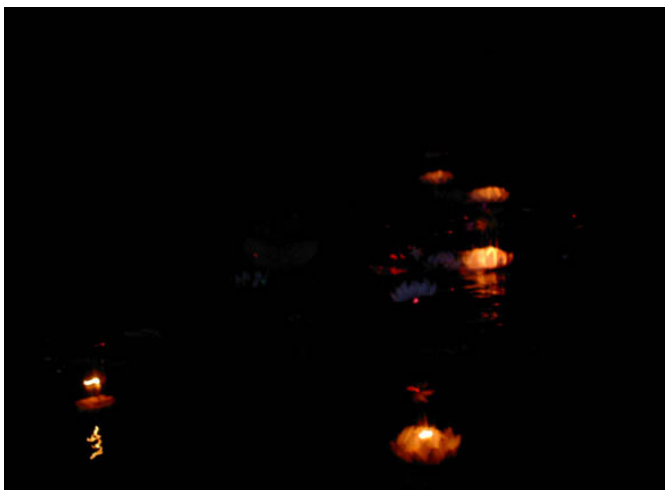
灯籠に灯をともし若者たち .



かわいい、かわいい行列 . 河へ向かって進んでいます .



蓮や竜をかたどった御輿が次々と運ばれていきました . 川に流す前に燃え始めたものも ! 危険 ! !



人々の想いを乗せて , 灯籠は河に流れていきました .

(総合地球環境学研究所 武藤千秋)

本年4月2日から9日までの8日間、人類生態班カウンターパートのラオス国立保健院(NIOPH)院長ブンニョン・ブーパー教授とラオス保健省官房副長官ナオ・ブッタ先生が長崎大学熱帯医学研究所の門司教授のご尽力で来日され、東京(2日-4日)および京都(4日-6日)、長崎(6日-9日)を訪問されました。お二人はラオス政府の高官で、私たちの研究遂行には欠く事のできない重要な方々です。来日の目的は、研究計画の詳細の合議とこれを機とした日本側の実施研究者との顔合わせによる友好の推進でありました。以下では、お二方の東京での滞在や会議の様子、人となりについてご紹介いたします。

お二人の来訪当日、成田空港に千葉大学の小谷先生と誘い合わせて迎えに出ましたが、空港で予定の便が1時間半も早く着いたことを知り、慌てました。手分けして探そうとしましたその時、後ろから「サトシ?」と問い掛けられ、振り向くとブーパー先生が目のお前におられ、二度慌ててしまいました。幸い、彼女の研究所と共同で保健医療行政官や研究者の管理研修を支援されている東海大学の渡辺良久先生が、ラオスの先生方を一足先に迎えておられ事なきを得ました上、両先生の宿泊先まで送って頂く事と相成り、こちら側の連絡の不備を反省させられました。

翌3日、お二人の先生方は午前中花見をかねた自由時間を過ごされました。ブーパー先生との会合は同日午後3時から東大人類生態学教室の集会室をお借りして催されました。出席者は大場、小谷、金田、川辺、高坂、中村、夏原、松村、村山、門司、山内のプロジェクトメンバー11氏および東海大学の渡辺、中村と関係する東大大学院国際農学専攻の石川、佐野、堀の4氏を加えた計15名の方々でした。出席者毎の所属とプロジェクトでの活動内容・役割の紹介を終えた後、セミナー形式でブーパー先生の講義を拝聴しました。講義は先生の履歴から始まり、ラオスの保健の現状と国家保健計画について一時間ほどスライドを交えて行なわれました。その後質疑応答やコメントがなされました。今回の会合はカウンターパート同士の初顔合わせであり、主要な研究メンバーがほぼ一同に会することができた点、意義は大きく、ラオスでの研究遂行上の友誼がより固まったものと考えます。会議は5時半には散会しましたが、引き続き懇親会場へ移り盛会で和やかに終えることができました。お二人は翌朝長崎大の金田先生と共に京都へ移られました。京都での先生方はセミナーの合間、満開の桜と自在な時を満喫されたかと伺っています。

ここで、お二方の人となりを私のささやかな体験から紹介いたします。来日されたブーパー先生との出会いは1994年

初めて、同年ビエンチャンで開催されました第一回ラオス下痢症会議の企画の時でした。その実施責任者が先生でありました。お会いした時点で非常に的確な組織指導ができる極めて有能な方との印象がありました。それもその筈で、先生はソビエト連合共和国で医学博士を取得され、英・仏語も堪能で、国家医科学委員会の長のみならず、サバナケット選挙区選出の現職国会議員ですらあるのです。私がJICA派遣専門家としてラオスに赴任しておりました当時、専門分野の微生物学に関し、ラオス語独自の専門用語確立の必要性を強く感じておりました。タイ語の医学辞書は手元にはありましたが、ラオスの用語とは異なるものも多く、病院の検査室ではまだフランスの専門用語が使われている状況でした。ブーパー先生は医科大学に在職されていた80年代に仏語-ラオ語医学用語集を編纂され、また医科学委員会ですでにラオス語の専門用語集を編纂されていました。下痢症会議の打ち合わせの席で私がその必要性を訴えた時、気軽にしたばかりの用語集を下さり、大変感激したことを思い出します。この用語集はその後改定され1997年に同委員会の名前で綿密な内容のラオス医学用語辞典として出版されています。ブッタ先生はラオス南部アタプー県のご出身で1998年から保健省官房副長官の職に就いておられます。日本へは2002年の京都でのWHO/WPRO会合出席以来2度目の訪問と伺いました。先生は東ドイツ時代のベルリンに留学されており独語、英語、仏語に長け、WHO等を主とした国際機関、諸外国からの医療支援、研究・技術協力など対外的な受入れ・調整役を一手に引き受けておられます。今回のセミナー後の懇親会でブッタ先生と水系伝播寄生虫症の話題になった折、かつて臨床の現場で、水田作業で炎症が起きたヒトの皮膚を顕微鏡で観察し、虫体を見出した経験があると教えていただきました。東独留学時には寄生虫学など微生物学を専攻されたことを知り、個人的にも今回大変有意義な機会を得ることができました。

終わりに東京での会議の折、私の下準備と打ち合わせの不備、また不慣れな司会にも拘らず、活発な討議へ導いて頂いた門司教授および出席の皆様、快く会場を準備提供くださった人類生態学教室大塚柳太郎教授および教室の皆様にご場をお借りして心から感謝申し上げます。

(国立国際医療センター研究所 中村 哲)



地球研での研究会  
(2004/4/5  
撮影者：大西秀之)



この写真は、2004年2月に、地球研の初仕事として、ラオスのサバナケット州、ソンコン郡、ラハナムゾーンのお寺で、高齢者検診をおこなっている風景である。これまで、たくさんの国々の地域の中でこのような検診を実施してきた。病院で患者をみる臨床医学に対して、生活の場で人の健康をトータルにみるのが、フィールド医学であり、臨床医学、エコロジカルメディスンなどと共通する。特に老年病や生活自立の予防と、慢性疾患をもちながらも、元気に老いることをめざそうとする老年医学に対して、フィールド医学というアプローチをしてきた。

老いは、遺伝子によりプログラムされているため、誰もがたどる道であるが、その反面、老化の程度は多様性を示す。市民マラソンでは、70歳台、まれに80歳台のランナーが42.195 kmをにこにこ走る姿には驚かされる。得意な能力や含蓄のある話など、若い者には負けない、“老人力”というパワーがあるのは確かである。逆に、ニューギニアの診療では、中年層でも、日本の高齢者にみられるような関節拘縮が頻繁にみられ、関節の老化が早くみられる現象があった。

高齢者の元気さの多様性は、もともとの遺伝的素質の上に、日頃のライフスタイルが大きく影響しており、文化や環境の影響をたいへん受ける。私は高知県香北町で10年以上、高齢者の機能評価と予防的介入を行うとともに、文化や環境の異なるアジアの国で地域在住高齢者のフィールド医学を実施してきた。

今回、地球研秋道プロジェクト、人類生態班（門司班長）の老年医学班（松林ユニットリーダー）として、学校医学班（金田ユニットリーダー）とともに、ラオス National Institute of Public Health (NIOPH) のブンニョン先生をカウンターパートとして、ラオスのフィールド調査が実現した。今回の調査地は、他の東南アジアや日本と比べて、高血糖や糖尿病、貧血が非常に多く、高血圧が少ないということがわかった。この原因追及には、今後くわしい血液検査とともに、いろいろな分野からのアプローチと協力が必要と思われ、戦略を考えていかねばならない。それ以外にフィールド調査の魅力は、地域へはいる苦勞を共にする仲間との友情、生活の場でみるお年寄りの崇高さと、尊敬の念を感じるときであらうか。人との一期一会を、悔いの残らないようにしたいと思っている。

（総合地球環境学研究所 奥宮清人）



ラオス、高齢者検診風景

## ズブに生きる | (低湿地生態班フィールド便り) 「ズブズブ」を食べよう！！

フィールドワークの楽しみのひとつとして、これまで自分の知らなかった生活の有り様を自分自身で経験することが挙げられるのではないかと思います。その中でも食の経験は、重要なものといつてよいでしょう。

秋道プロジェクト平野生態班は、その正式名称を「ズブズブ班」といい、低地や湿地などで行われる人・社会と自然環境の相互関係を明らかにすることがその目的となっています。そのフィールドでどのような新たな食の経験することとなったのかを紹介したいと思います。

NAFRI (National Agriculture and Forestry Research Institute) との協定締結に向けた12月のラオス訪問では、同時にいくつかの市場を見て回りました。野菜や肉・魚などのたくさんの食べ物が売られる中で、小魚や川エビ・小さなカエル・ゲンゴロウなどが雑多に入ったものが売られているのを見ました(写真)。まさしく平野の自然のあり方を示す食材だなと思ったのですが、それをどのように食べるのかということは全く想像が付きませんでした。



その食材を買って帰り、その夕方にあったピエンチャンの実業家夫婦の方に、それを調理してもらえることとなりました。出てきた料理は、それを菜っ葉やスープなどとともにさっと煮てあるものでした。そのご夫婦の説明によるとこれが朝の食卓で食べるものだということでした。そこではじめて食べて思ったのは、新鮮な川エビなどの素材のだしがかなりきいているということです。これらの食材にひとつひとつの身はそんなになくて、こらえ性のない私は食べがらが多いのにいらいらしてしまいがちなのですけれども、むしろそれらからでるだしは、新鮮なこともあって気になるようなおいなども全然なく、これまで自分が食べた食事にないうまみがありました。

この料理からは、自分の周囲の自然と自分自身のダイレク的な結びつきを感じることができます。その一方で、現代の日本の食事からそういったことを感じることは今や難しいことになっているということを今さらながら気づかされます。平野の生き物と、それらを生かしながらかつられ、毎日食べられているラオスの家庭の食事・生活のあり方から、人と自然の結びつきはどのようなものであるべきかを改めて考えてみる必要があるのではないかと思います。

(総合地球環境学研究所 西村雄一郎)

## ラオス生き物図鑑 1

## イヌ



雑貨屋の犬。店主はどこかに出かけているらしく、中をのぞこうとしたらこの犬がワウアウと言いながら出てきた。店の前の色褪せたバケツと同じような色をしていたが、犬のほうはまだ新品。もの言いたげな表情が印象的だった。ラオス・ピエンチャン近郊にて。(宮村春菜)

## 亀のお告げ その1

(亀屋報告)

亀屋です。私たちはプロジェクトのオリジナルグッズ開発を試みておりますが、なかでも、Tシャツその他の布製品を主力商品として、こだわりの一品を作成しようと思案しております。Tシャツというと、プリント業



完成予想図？

者に発注して出来合いのTシャツにベタリとプリントするのが通常ですが、これでは芸がありません。滋賀県に新旭町という町があります。ここでは、ワタの栽培から紡績、製織までの生産が行われております。ワタの品種も幾種かあり、織り方によってクレープ、天竺、帆布など様々な生地ができます。それぞれの生地の特性を生かし、Tシャツ、ハンカチ、バッグ類を作っていけるのではと思っています。京都のとある染め屋さんが染め方を教えてくれると言ってくれていますから、プロジェクトオリジナルのデザインを生地に染めます。Tシャツのプリント部分って汗が蒸れて不快なことってありますよね。染めならば、業者のプリントと違い通気性がありますから、暑いラオスの調査でも快適に過ごすことができると思います。そして何より、日本独自の綿布に日本独自の染めを施した品をラオスのカウンターパートの皆さんに贈呈することは、いい文化交流になるのではないのでしょうか。

これら商品開発にご要望のある方は、気軽に申し付けていただけるとありがたいです。

(京都大学大学院農学研究科 斎藤暖生)

## 次号発行のお知らせ

今回は編集者の不手際から、当初お約束していた発効日から大幅に遅れての発行となってしまいました。深くお詫び申し上げます。

次回第2号の発行は7月15日を予定しております。近く、寄稿依頼のお知らせもさせていただきます。今後ともよろしくお願いいたします。(斎藤暖生)

亀屋・ニュースレターに関するお問い合わせ  
e-mail:haruo@chikyu.ac.jp